

ウジハラ先生の



環境にやさしく、住みやすい「人中心」のまちづくり

エコ・リバブルシティ

#02 歩行者と自転車中心の賑わい空間 (デンマーク・コペンハーゲン)



コペンハーゲンのまちなか (ストロイエ)



まちなかの自転車道



カフェで賑わうスポット (ニューハウン)

コラム内容

- #01 都市と自然、人と車のためのまちづくり (アメリカ・ポートランド)
- #02 歩行者と自転車中心の賑わい空間 (デンマーク・コペンハーゲン)
- #03 人々にやさしい交通ネットワーク (フランス・ストラスブール)
- #04 岡山をエコ・リバブルシティに

低炭素で住む人が暮らしやすい都市「エコ・リバブルシティ」を、世界の都市から学び、実現へ。都市計画学の研究をしているウジハラ先生の全4回連載コラムです。

ぶらつき、のんびりできる空間

人口60万人のコペンハーゲンはデンマークの首都でありながらコンパクトにまとまった暮らしやすい街である。中心部には人々が賑わう歩行空間(ストロイエ)があり、買物などの明確な目的を持たずに、まちなかでも多い。魅力的な店舗が軒をつらね、歩道にはオーブンカフェが立ち並ぶ。そこは、人が集い、佇みたくなる空間がある。

人を集める装置

コペンハーゲンは、都心から郊外までを自転車専用道がなく整備されており、鉄道も都心から放射状にいくつも延びている。これらは多様な人々をまちなかへ集めるための装置としてうまく機能している。自家用車以外に、まちなかに気軽に来訪できる手段があることは重要だ。なぜなら、自家用車での来訪は、まちなかでの行動範囲や滞在時間を規定し、回遊行動が起りにくい。言い換えれば、公共交通や自転車、徒歩で来訪することは、そこで賑わい、佇むための基本要素である。

まちづくりは長い物語

約60年前、ここは道路や駐車場の空間として利用されていた。それを人中心の空間へ変容させた立役者がヤン・ゲール氏(元大学教授)だ。空間利用のされ方が変わることでも人の動きがどのようになるのか、科学的な裏付けを地道にとり、行政政策を強力に後押しした。結果、人中心の空間は点から線へ、そして面へと、まちなか一

体に拡がり、いまでは世界的な名所にもなった。

約1年前、私はヤン・ゲール氏にヒアリングした際、「まちづくりは長い物語ですよ」という言葉を頂いた。岡山市でも県庁通りの一車線化や西川周辺の歩行者天国化に向けた動きがある。長い物語のターニングポイントにしたい。



岡山大学
うじはら たけひと
氏原 岳人 先生

都市計画学の研究者：環境制約・人口減少下で求められるサステナブルな都市・地域・国土計画、人間活動について探究しています。

岡山大学では、環境省・環境研究総合推進費によって「エコ・リバブルシティの都市構造モデルの構築とその計画論に関する研究」を推進しています。



2017年

1950年代